こんにちは！市民病院です！

心に残る看護

看護の現場では、患者さま、その家族の方々とのたくさんの出会いや別れがあります。
縁あって言葉を交わし、看護を通して触れあった人々との心に残る一場面を紹介します。

いってらっしゃい

5病棟　藤原　優

緊急手術となった患者さまがおられました。患者さまの不安の軽減のためにも、手術までの流れなどを説明し、「わからないことは何でも聞いてくださいね」とお伝えしましたが「何が何だか分からなくて、分からないことすら分からない」と話されたまま、手術室への入室となりました。

手術室に入られた後は、応援しかできません。わたしは、がんばってきてほしいという願いを込めて、患者さまには「いってらっしゃい」、「病棟で待ってますね」と声をかけています。

藤原　優さん

手術の後、お迎えにあがると、「ただいま」と笑顔で返事が返ってきました。

退院の日、患者さまから手紙が届きました。

『不安だらけの時、優しい言葉をかけていただきました。素敵な笑顔で気持ちがなごみ、本当に救われました。安心して入院生活が送れたことを感謝しています。手術前の《いってらっしゃい！》も忘れません。白衣の天使って本当だなと思いました』

看護師は、患者さまの異常の早期発見や苦痛の状況把握などを優先的に行いますが、患者さまの思いや不安の傾聴も大事な役目です。

何気ない一言が患者さまの不安の軽減に繋がり、逆に患者さまを傷つけることもあります。

言葉の重みを感じながら、今後も白衣の天使になれるよう、日々努力していきたいです。

いつも最善のケアを

1病棟　有藤　沙規

『終末期の残された時間をどのように過ごしたいか』

患者さま自身が家族や周りに意思表示しておくことが大切であると言われています。

再入院されてこられたある患者さまは、その時点では意思決定できる状態ではありませんでした。それでも、ご家族との話し合いの結果、尿道カテーテルは挿入せず、オムツ着用と決めました。それは、患者さまが最後まで自分で排泄行動を希望し、カテーテル挿入を望んでいないことを話されていたからです。

数日後に永眠されましたが、わずかな期間でも、患者さまが望まれていた看護ケアができたと思います。

また、食べることは人生の中の楽しみの一つであり、多くの人が最期まで食べられることを希望しておられます。しかし、病気によって食べられない、あるいは制限されている患者さまに対して『わたしたちは何ができるのか』と、日々悩みながら、多職種のチームと連携し、よりよい看護を目指しています。

有藤　沙規さん

そんな中、ちょっとした工夫で、これまで食べられなかった患者さまが口から食べられるようになり、笑顔を見せてくださるようになりました。食べることが活力あふれる行動に繋がっていく様子を目の当たりにすると、口から食べることは『生きる喜び』を味わうことなんだなと感じます。

２０２５年に訪れる超高齢社会に向け、食べられない苦しみを抱える患者さまはこれからも増加していくと思われます。

看護師として、患者さまが『食べる』意味を考え、『食べる』ことを支え、これからも患者さまとご家族へ最善のケアを提供できる存在でありたいと思っています。

問い合わせ　加東市民病院　☎42・5511